

C O N T E N T S

特集

ホスピタリスト
のための

画像診断②脳脊髄編

はじめに | ホスピタリストが脳脊髄領域の画像診断を学ぶために：

デスクで病棟で活用できるこの1冊—— 381

●黒川 遼 ミシガン大学 放射線科/東京大学医学部 放射線医学講座

Part 1 総論

1. 頭部CTの読影手順：「ふな釣り」のごとく奥深い世界—— 385

●松木 充 自治医科大学とちぎ子ども医療センター 小児画像診断部

2. 頭部MRIの読影手順：

その撮像法をなぜ行うのか、何を探すのか：病変の検出感度を高めるための基礎知識—— 397

●中井 雄大 東京大学医学部 放射線医学講座

3. 造影の必要な頭部CT/MRI：最初から行うべき病態、追加が望ましい病態—— 413

●神田 知紀 神戸大学医学部附属病院 放射線診断・IVR 科

[コラム①] 特徴的なMRI所見を呈する疾患：まず知っておきたい信号をふまえて—— 422

●張 申逸 東京大学医学部 放射線医学講座

[コラム②] MRI所見で診断できるもの、診断が難しいもの：

覚えておきたい4つの所見と、注意したい3つの疾患—— 426

●仲谷 元 順天堂大学医学部附属順天堂医院 放射線科

4. 脊髄MRIをオーダーすべきとき：主な撮像法、緊急性の高い所見—— 431

●豊辻 智則・三和 大悟・加藤 武晴・道本 幸一 JR大阪鉄道病院 放射線科

[コラム③] 椎体炎と関連疾患：脊椎・脊髄周辺の画像所見と読影のポイント—— 440

●稲岡 努 東邦大学佐倉病院 放射線科

[コラム④] AIと画像診断：今、コンピュータ支援診断はどうなっているのか？—— 446

●中尾 貴祐 東京大学医学部附属病院 コンピュータ画像診断学/予防医学講座

Part 2 各論（脳血管障害・外傷）

5. 脳梗塞：MRIの各シーケンスに得手不得手があることを理解しておこう—— 449

●飯島 健 新百合ヶ丘総合病院 放射線診断科

6. 脳出血：CT/MRIを選択する際に考えるべきこと—— 457

●越野 沙織 東京大学医学部附属病院 コンピュータ画像診断学/予防医学講座

●責任編集 黒川 遼
ミシガン大学 放射線科/東京大学医学部 放射線医学講座
八重樫 牧人
千葉西総合病院 内科

●編集委員 平岡 栄治 (東京ベイ・浦安市川医療センター 総合内科)
八重樫 牧人 (千葉西総合病院 内科)
清田 雅智 (飯塚病院 総合診療科)
石山 貴章 (セントルイス大学 内科 ホスピタリスト部門)
石丸 直人 (愛仁会明石医療センター 総合内科)
濱田 治 (愛仁会高槻病院 総合内科)
藤谷 茂樹 (聖マリアンナ医科大学 救急医学/東京ベイ・浦安市川医療センター)
●顧問 徳田 安春 (臨床研修病院群プロジェクト群星沖縄)

7. くも膜下出血, 静脈洞血栓症: 画像所見と病態の知識をいかに組み合わせしていくか? — 465

●黒川 真理子 ミシガン大学 放射線科/東京大学医学部 放射線医学講座

8. 頭蓋骨骨折, 脳ヘルニア, びまん性軸索損傷: 頭部外傷における画像所見のみかた — 473

●川口 真矢・加藤 博基・松尾 政之 岐阜大学医学部 放射線科

Part 3 各論(非血管性・非外傷性)

9. 脳腫瘍: 脳実質内悪性腫瘍と腫瘍類似病変の鑑別 — 479

●木口 貴雄 一宮西病院 放射線診断科

10. 髄膜炎・脳炎: 臨床での対応力を高める画像所見を知っておく — 487

●原田 太以佑 北海道大学大学院医学研究院 放射線科学分野 画像診断学教室

11. 脱髄性疾患: 多発性硬化症 (MS) や類縁疾患の初期診断のポイント — 499

●横田 元 千葉大学大学院医学研究院 画像診断・放射線腫瘍学

12. 代謝性疾患: 典型症例と参考症例にみる放射線科医のアプローチ — 509

●横山 幸太 東京医科歯科大学 放射線科

連載

病棟医療革命

第5回① 織田病院編 | 医療DXは地方から!?: 地域を支える, 持続させる, 発展させる — 520

●織田 良正・古川 祐太郎 祐愛会織田病院 総合診療科/佐賀大学医学部附属病院 高度救命救急センター

第5回② 練馬光が丘病院編 | 30 seconds to future: XRのトレンドを知って未来に備える — 525

●小澤 秀浩 練馬光が丘病院 総合救急診療科 総合診療部門

Clinician Update — 530

●官澤 洋平・石丸 直人 愛仁会明石医療センター 総合内科

次号目次 — 540

編集人——山下 隆久, 荷輪 洋志

レイアウト・表紙デザイン——公和図書デザイン室/イラスト——ソルティフログ デザインスタジオ (サトウヒロシ)

注意 本誌に携わった全員が、本誌に示す情報が正確で、実臨床を反映したものとなるよう極力努力した。しかしながら、編著者ならびに出版社は、本誌の情報を生じた結果生じたいかなる不都合に対しても責任を負うものではない。薬物の使用にあたっては、個々の薬物の添付文書を参照し、適応、用量、付加された注意・警告に関する変化を常に確認されたい。

